昭和23年6月25日　第3種郵便物認可　平成11年5月1日発行（毎月1回1日発行）第53巻・5号（通巻619号）

ISSN－0037－3664

視聴覚教育

THE AUDIO-VISUAL EDUCATION　VOL.53　NO.5　1999

「視聴覚教育」という言葉 5

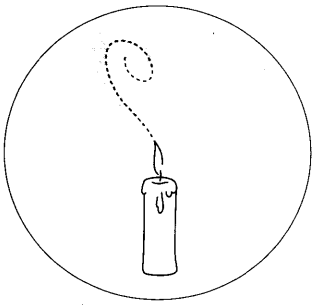
エッセイ'99・"テレビ学習"と博物館

特別寄稿

視聴覚教育という言葉の豊かな含蓄

時代遅れの判官びいき

吉田章宏
川村学園女子大学教授
東京大学名誉教授



はじめに

「視聴覚教育」という言葉を考えてみたい。

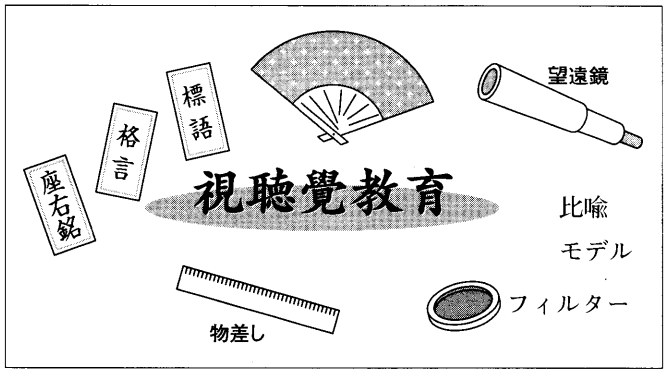
この言葉は、近年、視聴覚教育の世界で、どうも、おろそかにされ始めているらしい。言いかえれば、視聴覚教育に関わる人々の間に、「視聴覚教育」という言葉に違和感を覚える人々が増えて来ているという状況があるらしい。「視聴覚教育」という言葉は、古臭く野暮ったく時代遅れで、時代の最先端を行くマルチメディア教育を含めた総称的な名称としては、どうも相応しくない、と感じる人々が増えている、ということでもあろうか。人が、自分の名前に違和感を覚えるということもあるし、それが理由で改名するということもあるのだから、古い名前に違和感を覚え改名するということ自体は、良いとも悪いとも、直ちに言えることではない。ともあれ、「視聴覚教育」の語は、時代の風にさらされて、風前の灯火の運命にあるように見える。で、この言葉が時代の趨勢に流されて、完全に抹殺され、廃語とされてしまう前に、ひとつ、敢えてこの趨勢に逆らって、判官びいきではないが、この「視聴覚教育」という日本語の言葉の豊かな含蓄を解明して弁護し、ささやかな抵抗を試みてみようと、ふと思い立ったの

である。

「名は体を表す」ということ

まず、どんな表現であれ、名前や名称などどうでも良いことだ、という考えには、私は与しない。その考えは、最初に、ここで断固として否定しておきたい。否定されるべきその考えによれば、たとえば、物事を表す名称とは、単に便宜的に、互いに区別できるラベルやレッテル、はり札のようなものだとされる。だから、例えば、名称は、「X」だろうと、「123」だろうと何でも良いのだが、ともかく、他の物事と互いに差異化できればよいのであって、我々の場合も、便宜的に「視聴覚教育」という名前を仮につけておくに過ぎないのだ、ということになる。だから、気に入らなくなったら、いつでも何にでも、好きなように変えたらよい、ということにもなる。だが、気に入ったり、気に入らなかったりする、という事実そのもののなかに、そもそも名前とは、そんな風に好き勝手に変えられるような性質のものではない、という一つの真実が、露呈して来ている。

一つの言葉には、その言葉の母体となる言語……我々日本人の場合は日本語……において、その言葉と人々との関わりの歴史がある。その歴史はまた、人々と事物現象との関わりの歴史でもある。そして、そのような歴史の背景には、その社会の歴史がある。人々には、それらの歴史にまつわる、それぞれの記憶や思い出があり、その言葉を書き、読み、話し、聞くとき、一人一人の人間が想起し連想する多様な関連する言葉と物事が無数に、その言葉の地平として、背後に控えている。一つの言葉は、そうした言葉と物事と人間と社会の絡み合った歴史の総体を、凝縮して目に見え耳に聞こえるものとする一つの核、譬えてみれば、扇の要、レンズ、顕微鏡や望遠鏡、比喩、モデル、フィルター、あるいは、物差し、などのようなものとして、世代から世代に引き継がれている。しかも、人は言葉を通して物事を把握し、表現し、理解する。だから、言葉には、その物事を人々が、どう把握し、理解しているか、ということも、また、表現されている。で、視聴覚教育を「視聴覚教育」という言葉で表すか、単に、レッテルとして、例えば便宜的に「X」や「123」で表すか、ということは、決してどうでもよいことではないのだ。名称は、その物事の変わらぬ本質を簡潔に表現する。物事をその名で呼ぶたびに、その名は、そこに表現されているその物事の本質を意識化することを我々に促す「呼びかけ」となる。それは、また、言わば「座右銘」、あるいは、人を覚醒させ鼓舞する「格言」や「標語」ともなりうる。もちろん、長年に亘って使い古された名称がその最初の瑞々しい響きを失い、かつてその名称がもっていた働きが衰えてしまう、ということもまた起こり得る。



誰でも、人生で少なくとも一度は詩人になる時がある、という言葉を、ある芸術家から聞いたことがある。その時とは、人が親になって、自らの子に命名する時だ、ということだった。生まれ出たばかりの我が子への深い思い、願いと夢を短い言葉に託して表現することに、誰でも、親として真剣に努める時だからである。落語の「ジュゲムジュゲム……」の長い名前の滑

稽さを想起するなら、親としての溢れる思いを適切に表現する長すぎない名前を子に命名することの困難さが納得されよう。また、名前に凝縮され表されている深い思いが、誰の名前にも秘められているという可能性も、浮かび上がってくる。子は、一生を通じて、自らの名前に親が込めた思いを折に触れて思い起こしては、親の心を思うのである。そこで、我々の前に、幾つかの問いが立ち現れてくる。

言葉「視聴覚教育」への問いと発見

「聴視覚教育」ならぬ、「視聴覚教育」という言葉は、そもそも日本語であるのか、ないのか。既に、日本語になっているのか、いないのか。日本語としての、この言葉には、どのような意味が込められていたのか。今日、この言葉が表すには相応しくなくなった事物あるいは物事とは何か。改めて、この言葉に、我々が託することのできる意味は何か。この言葉は、一度は詩人になる可能性のある凡人としての我々一人ひとりが、そこに託することを望む視聴覚教育への思いを表すのに、果たして、相応しい言葉であるのか、ないのか。この言葉よりも、さらに相応しい言葉があるのか、ないのか。以上のような問いに思いを巡らせているうちに、私は、ささやかな一つの発見の喜びを味わった。その発見を、ここに述べてみよう。

その発見とは、「視聴覚教育」という言葉は、視聴覚教育の本質を表現するのに、長すぎず短か過ぎない言葉として、内容の含蓄が実に深く豊かで、まさに、言わば「詩人の魂」が込められた、簡にして要を得た、素晴らしい言葉となっている、ということである。

そもそも、「視聴覚教育」という日本語の言葉が、日本の教育の世界に現れたのは、〝オーディオ・ヴィジュアル・エヂュケーション(Audiovisual Education)〟という英米語の翻訳語としてであり、第二次大戦後のことであった、という(『視聴覚教育事典』明治図書、一九六二年六版、一六ページ)。しかも、一九五〇年ごろまでは、原語の語順に忠実に、「聴視覚教育」と呼んでさえいたという。そうした事情ゆえであろうか、「視聴覚教育」という言葉には、"Audiovisual Education"という原語を付して用いられることが極めて多い。まさしく、戦後日本の「翻訳文化」を背景としている言葉なのである。ちなみに、現在の「日本視聴覚教育協会」の前身は、「日本映画教育協会」(一九二八年創立)であり、現在の名称に改称されたのは、一九八〇年であった、という。当時、関係者の方々が恐らくお感じになったに違いない、「視聴覚教育」という言葉の瑞々しさが、ふと思われる。ところが、"Audiovisual Education"という言葉そのものは、この言葉の生まれた本家本元の米国では、近年、すっかり廃れてしまっているらしい。確かに、"Audiovisual"という言葉には、「耳に聞こえる」と「聴覚」、「目に見える」と「視覚」という意味以上の深い含蓄は、どうも無いようにも感じられる。時代が変わり人が変われば、自然消滅する運命にあった、ということであろうか。

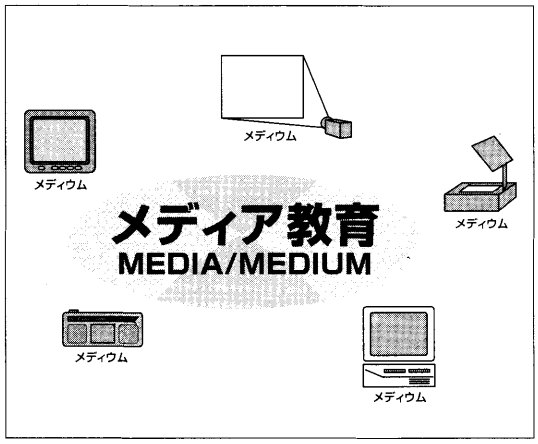
Ulrich's International Periodicals Directoryの一九九八年(三六版)vol.4.で調べてみた。"Audio Visual Education"という名称を含む誌名の定期刊行物は、本誌『視聴覚教育』のほか、日本の一、二誌のみに限られている。隣国中国では、『視聴覚』という言葉は現在でも用いられているらしい。しかし、英文誌名"Audio visual communication review"(一九五三〜六二)[A.V.communication review と改称(一九六四〜一九七七)]、"Audio visual communications(一九六七〜)、"Audio visual instruction"(一九五六〜一九七九)["Instructional Innovator"と改称]、などの誌名も、Ulrich's 一九九八年版からは、既に消えている。英語の"Audio visual"という語を用いている定期刊行物は、全世界で

一五誌を数えるに過ぎない。代わって、"Media" "Multimedia"などの名称を冠するものが増えて来ている。少なくとも、米国では、"Audio visual"という名称の雑誌名での採用は衰退の一途、と言えそうだ。本家の米国が廃したから、分家たる「翻訳文化」国家の日本でも廃するしかないのだろうか、という何とも情けない自問も、また、生まれて来ようというものだ。

「メディア教育」という新鮮で洒落た言葉

では、例えば、「メディア教育」という洒落た言葉ならどうか。カタカナ言葉で、新鮮な響きもあるように聞こえる。「メディア」(media)は、「メディウム」(medium)の複数形である。「マス・メディア」、「ニューズ・メディア」、「マルチ・メディア」の「メディア」である。この「メディア・メディウム」は、恐らく「媒介、媒体」という意味であろう。だが、「諸媒体教育」では日本語にならず、何のことやら分からない。「メディア教育」なら格好もよく、何となく分かったような感じもする。多種多様な「メディウム」をも包括する「メディア」による教育という意味だ。将来現れるどんな「メディウム」による教育も総て、その仲間に入れられるだけの「清濁合わせ呑む」包容力をもった言葉であるようにも思われる。文化の輸入国日本の「翻訳文化」の雰囲気を漂わせてもいる。媒体を意味する「メディア」なる言葉には、暗黙のうちに、「教え育てる」教育という考え方、媒体を通して伝達するのは知識と情報だという考え方、が含まれているように、私には感じられる。言い換えれば、「媒体」重視には、媒体を通じての「知識や情報の伝達」という考えが支配的であるように、私には思われる。

だが、もし仮に、古い言葉だからという理由だけで、「視聴覚教育」という言葉を破棄するとしたら、それは乱暴にすぎる。そんな理由で言葉を一々破棄していたひには、言葉というものは成り立たなくなるだろう。例えば、ここで当然のように用いている「言葉」という言葉自体、たいへん古い言葉なのだ。



我々は「視聴覚教育」という言葉をどうするか、という主体的な問い

ここで、問うべき問いは、むしろ、「視聴覚教育」という言葉に、この言葉を用いて来た我々が、どのような意味を付与して来たのか、という問いであろう。また、この言葉が、どのような視聴覚教育の本質的な意味の意識化を我々に促す「呼びかけ」の言葉、「座右の銘」、「格言」や「標語」となっているか、ということであろう。いや、さらに、我々は、「視聴覚教育」という言葉に、いかなる意義と意味を付与することを主体的に選ぶのか、ということでもあろう。そのことによって、この言葉が、視聴覚教育のいかなる本質を、我々が意識化する助けとしようとするのか、ということでもあろう。理由はともあれ、そうした助けの働きを、もしこの言葉が果たすことが不可能になったなら、その時こそ、廃語とするに相応しい、とい

うことになるだろう。

日本語としての「視聴覚教育」という言葉：まず、「視」と「聴」と「覚」

「視聴覚教育」という言葉は、“Audiovisual Education”の翻訳語である。感覚と知覚のうちでも、触覚、味覚、臭覚などではなく、「視覚」と「聴覚」による「教育」、という意味が表現されており、それ以上でもそれ以下でもない。本来なら、「視覚的・聴覚的・教育」とでもすべきものが、簡潔化され省略されて、こういう表現になっている。また、たったそれだけの意味の意識化を我々に促すに過ぎない、率直に言えば、比較的、内容の貧しい表現である。つまり、目を使い使わせ、耳を使い使わせて、行う教育である。本質的には、詰まるところ、「絵を見せ、音を聞かせて、教え込む教育だ」、おおよそそんな風に考えている一般人も多いようだ。筆者自身にも、そう考えていた時期があった。だが、「視聴覚教育」は単なる「見聞教育」ではない。「見物教育」でもない。

視聴覚教育の定義には、「形態論的定義」、「機能論的定義」、「教育工学的定義」などがあるそうだ（『視聴覚教育』樹村房・一九八五年）。そこに見えてくることは、視聴覚教育のどの定義も、視聴覚教育の変わらぬ本質を未だとらえるには至っていない、ということのように思われる。それだからこそ、日々新しい発見と発展のあるこの分野で、新しく誕生するある種の教育が、視聴覚教育の領域の事柄であるのかないのか、的確に判断できない、ということが起こり易くなるのであろう。また、このことから、視聴覚教育の性格も、曖昧模糊としてくるし、視聴覚教育の領域も拡散し境界もぼやけてくる、ということが起こる。その点、「メディア教育」は、比較的分かりやすい。「形態論的定義」の純化による命名として、メディアを使って営まれる教育がメディア教育、という単純明快な理解が、この言葉には表現されている、と考えられる。メディア（メディウム）が介在しているかいないか、それは何か、そして、教育であるかないか、とだけ問えば、視聴覚教育のもっていた曖昧さは、たちまち解消することになる。

では、改めて問おう。「視聴覚教育」なる語はどうか。言うまでもなく、「視」「聴」「覚」「教」「育」の五つの漢字から構成されている。これら五文字の中に、視聴覚教育の本質に照らして、省いてもよい無駄な文字があるだろうか。

まず、最初の「視聴覚」の三字の漢字それぞれについて、『角川当用漢字　字源辞典』（加藤常賢・山田勝美著、角川書店）などの助けを借りて、検討してみることにしよう。「視る」（look at, watch, observe）は単なる「見る」（see）ではなくて、「目をじっととめて見る」こと、注意深く、気をつけて「見る」ことを意味する。「視」の形成する単語には、「視覚」のほかに「視野、視力、視線、視察、視聴覚、注視、正視、直視、透視、凝視、可視、座視、熟視、監視、検視」などがある。同様に、「聴く」（listen to）は単なる「聞く」（hear）ではなくて、「耳をかたむけてよくきき会得する」ことである。原始義は、「つまびらかに聞いて会得する」である。注意深く、気をつけてよく「聞く」ことを意味する。「聴」の形成する単語には、「聴覚」のほかに、「聴聞、聴取、聴講、聴衆、視聴、拝聴、謹聴、傍聴、傾聴、静聴、盗聴」などがある。そして、「覚」は、単に「視覚」の「覚」、「聴覚」の「覚」であるばかりではなくて、「覚る」ことを意味する。「覚」は、言うまでもなく、「覺」であり、その上半部分は、「學」と共通であり、「あきらか」という意味をもつ部首である。下半分は「見」である。したがって、「覚」は、「目の前がぱっとあきらかになる」というのが、その原始義である。「覚」の形成する単語には、「知覚、視覚、触覚、

聴覚、味覚、才覚、感覚、錯覚、幻覚、統覚、予覚、覚知、覚悟、覚醒、自覚、不覚、大覚、正覚、先覚」などがある。

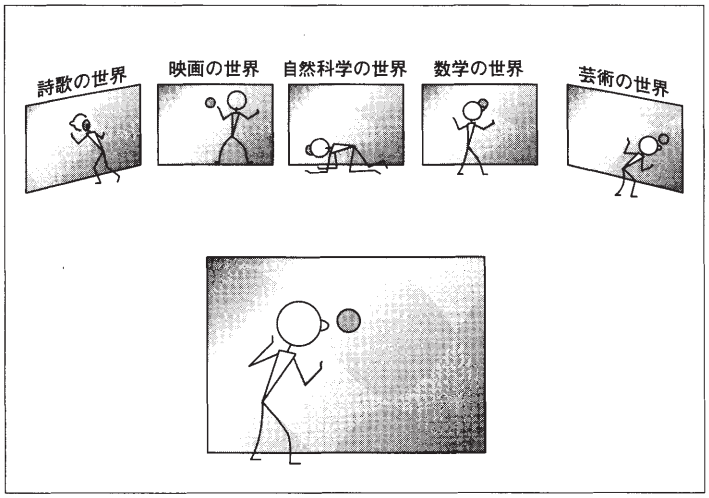
「覚」とは何か

ここで、とりわけ、「覚」とは何か、ということが問題となる。

「覚」とは、何事かを「覚る」という出来事が起こり、覚る以前の古い「旧世界」から出て、覚る以後の新しい「新世界」へと入ることである。

寺田寅彦の随筆『柿の種』（岩波文庫）の冒頭に、「詩歌の世界」に通じる小さな穴のことについて記した短章がある。それを、かつて群馬県境小学校の生徒が、斎藤喜博校長の講話の言葉に学んで、平明に語っている言葉がここにある。「私たちのふつうの生活と、歌や詩の世界とのあいだには、向こう側が見えない［ガラス］板のようなものがある。その板には小さな穴があいていて、歌や詩の世界に行けるようになっているが、努力しない人にはその穴がみつからない。努力してその穴を見つけ、何度もその穴をいったり来たりしているうちに、穴は大きくなり、らくに通れるようになってくる。そして、私たちも豊かになっていくのだ、……。私たちも、先生に導かれながら、見えないこの穴をくぐり抜け、私たちの知らない世界にふれ、おどろきとよろこびにひたったことが何度もありました。」（斎藤喜博著『教育学のすすめ』、一九六九年、筑摩書房、二五一～二五二ページ）。寅彦は書いている。「まれに、きわめてまれに、天の焔を取って来てこの境界のガラス板をすっかり溶かしてしまう人がある」とも。穴の変化は、緩慢も急激も、ある。

※書籍表紙画像
寺田寅彦著
『柿の種』
岩波文庫



さて、この生徒の言葉に沿って言うならば、「覚」とは、「小さな穴」を見つけ、何度も行ったり来たりして、新しい世界に馴染むことである、と言ってもよいであろう。現象学的社会学者、A・シュッツの言葉で言えば、「ショック」（"Jolt"）を伴う諸世界（「有限の意味諸領域」）の間の移行を経験することである。これは、「詩歌の世界」に限らず、ほかの世界、「数学の世界」であれ「芸術の世界」であれ、同様なのである。教育の中心の核には「覚」がある。教育の核たる「覚」なき教育は、未だ皮相な教育なのである。

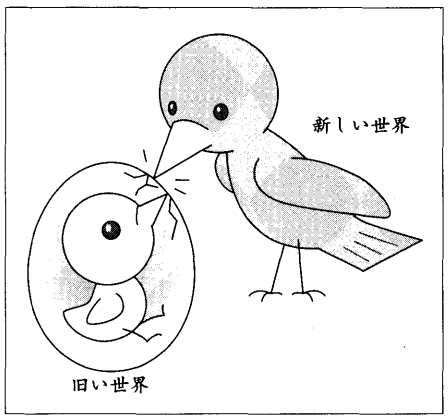
日本語としての「視聴覚教育」という言葉：つぎに、「教」と「育」

「教育」という漢字の語源的語義を調べてみ

ると、「育」という漢字の［意味］は、元々、「胎児が頭を下にして生まれ出ること」だったという。［字形］から見ると、子の上下逆さの形（とつ）と、音を表す「月」（じく）（肉）とからなる形声字で、「月」（肉）（ジク）の表す意味は「乳」（ジュ）の「生まれ出る意」なのだという。

また、「教」という漢字の［意味］は、元々、「鞭で打って習わせる」という意味で、［字形］は、鞭をもって打つ意味を表す「攴」（はく）と、習う意味と同時に音を表す「效」（ならう意）とを合わせた、会意に声を兼ねた字だという。

「育」が子どもが自ら生まれ出る自発の意味合いが強いのに、「教」は他が強いて習わせる、学ばせる、という意味合いが強い。したがって、「教育」という言葉には、「育」だけではなく、「教」だけでもない、「育」と「教」の両者を統合した営みとして、「教育」がとらえられている、と読める。あるいは、そのような意味を、我々は、この言葉に付与することができる。「育つ」を本人の自由に任せ放置するのではないが、さりとて、「教える」のみの強制だけでもない。「教える」と「育つ」の統合として、「教育」を理解することができる。「教育」という言葉には、外の世界から他が強く働きかける動きと、自らが進んで内の世界から外の世界へ生まれ出ようとする動きの両方が、つまり、他発と自発の二つの契機が共に、全体として一つに統合されてとらえられている、と理解することもできる。「啐啄」（そったく）という言葉が、想起されもしよう。



啐　啄

それでは、教育とは何か

教育は、世間では、単に「教え育てる」こととして、理解されている。例えば、教師が生徒を「教え育てる」ことなどとして、である。しかし、それがすべてなのであろうか。仮に、教師である先生が生徒である子どもたち（仮に二人の子どもたちとしよう）を教育するという状況での出来事を、教育における典型として採り上げ、考えてみよう。教育は人間と人間との間の営みであるからして、その具体的状況では、「教え育てる」という以外の多種多様な出来事が起こりうるし、また、起こってもいるのである。この場合、確かに、教師が子どもに「教えつつ（子ども）を育てる」という出来事が起こっているとするのが最も自然な理解であろう。しかし、そこで起こっていることは、決してそれには限られない。次の②以下の多種多様な出来事が同時進行している。

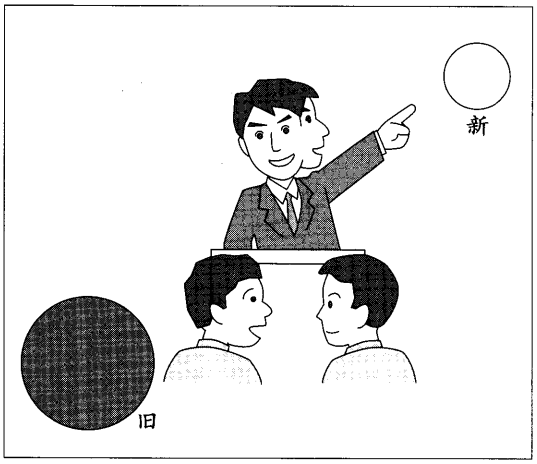
①教師が子どもに「教えつつ、（子どもを）育てる」
②教師が子どもに「教えつつ、（自ら、教師として、人間として）育つ」
③子どもが教師に「教えられつつ（自ら、人間として）育つ」
④子どもが教師に「教えられつつ（図らずも、教師を）育てる（ことになる）」
⑤子どもが教師に「教えつつ、（教師を）育てる」
⑥子どもが教師に「教えつつ、（自ら）育つ（ことになる）」。事柄によっては子どもが、「先生」となり、教師が「生徒」となる。
⑦教師がある子どもに「教えつつ、（他の子どもを）育てる（ことになる）」

⑧教師が他の子どもに「教える（のを見て）、（ある子どもが自ら）育つ（ことになる）」
⑨ある子どもが教師に「教えられつつ、（それを見る他の子どをも）育てる（ことになる）」
⑩ある子どもが他の子どもに「教えつつ、（他の子どもを）育てる」
⑪ある子どもが他の子どもに「教えつつ、（自らが）育つ」
⑫ある子どもが他の子どもに「教えられつつ、（他の子どもを）育てる（ことになる）」
⑬ある子どもが他の子どもに「教えられつつ、（自らが）育つ」
⑭ある子どもが他の子どもに「教える（のを見て）、（教師が自ら）育つ（ことになる）」など、など

（吉田章宏著『教育の心理』一九九五年、放送大学教育振興会、二六ページ）

こう考えてくると、教育を、ただ教師が子どもを「教え育てる」こととしてのみとらえることの一面性と不十分さが際立って見えて来る。むしろ、「教育」は、以上のようなことのすべてを含めて、「共育」として、つまり、「教師も子どもたちも、その教育という人間と人間の間の営みを通し、それぞれの世界と物事に応じて、相互に先生となり生徒となりながら、共に育つこと」としてとらえるべきなのだ。

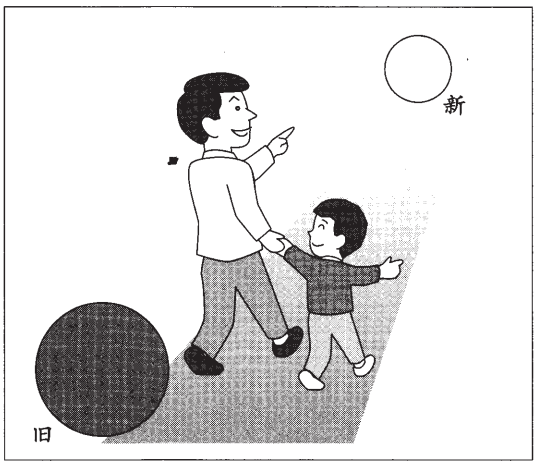
教育のこの理解は、実は、教育実践者、芦田恵之助（一八七三―一九五一）の教育遺碑（所在地、北海道小樽市緑小学校）に遺された言葉「共に育ちましょう」に直につながっている。芦田は、その小書『共に育ちましょう』に、次のように記している。「共に育ちましょう」は、「私の教育信念を標語化したものです。教育の行われる所、たとえば家庭に於て、一家のこらず共に育ちましようとこいねがい、学校では師弟学友悉く共に育ちましようとはげみ、隣保部落の人々が、相共に育ちましようとはかるようになつたら、世はきわめて平和なものになるでしよう。私は七十九の今年まで、人心づいてから、思いを教育にひそめて、ようようこの一標語に到達しました。そして今のところ、これ以上のものを考え得ませんので、そこに安んじているのでございます。」（芦田恵之助、一九五二年、二ページ）と。



本質的に、「教育は共育」なのである。

では、〝EDUCATION〟とは何か

さて、他方、英語で「教育」に相当する言葉は“EDUCATION”である。この言葉は、カナダの現象学的教育学者ヴァン・マネンの解釈によれば、その語源として、ラテン語の“educere”と“educare”という二つの言葉をもっており、子どもの教育 EDUCATION について言うならば次のようになる、という。すなわち、人間はだれでも、ついには、子ども時代の世界から育ち、そこから出なければならない。そこで、“educere”は、その子どもを、子どもの世界から、教育者が「導き出す」（educere: to lead out of）ことであり、“educare”は、その子どもを大人の世界へと教育者が「導き入れる」（educare: to lead into）ことだ、というのである。もともと、教育者（pedagogue）というギリシャ語の言葉は、子どもの世話をする関係にある



人を意味していた、という。子どもの生活に「方向づけ」と「心配り」をするという意味、子どもに「付き添う」という意味で、「導く」という意味と結び付いていた、という。「導く」とか「案内する」という考えには、「手を取って」、「見守りながら元気づける」という意味が結び付いている。そこで、教育者は子どもに向かって、教育において、次のように呼びかけていると、マネンは比喩的に表現する。

「ほら、わたしの手をお取りなさい」、「いらっしゃい、私が世界を見せて上げましょう。一つの世界への道を、私の世界、そして、あなたの世界を。私は、子どもで在ることについて、多少知っています。私もそこに、今あなたが居るところに、以前、居たことがあるからです。私は、かつては［今のあなたのように］若かったのです。」（Max van Manen: The Tact of Teaching-THE MEANING OF PEDAGOGICAL THOUGHTFULNESS-SUNY 1991 p.38.）このように語りかけ、旧い世界から「導き出し」、新しい世界へと「導き入れる」のが、教育者(pedagogue)だ、というのである。

教育者は子どもを、旧世界から「導き出し」新世界に「導き入れる」とき、子どもの歩みに付き添って行く、という意味で、子どもと「共に新しい世界へと生まれ出る（つまり育つ）」ことになる。しかし、子どもは、決して、ただ単に強引にいやいや強いられて外へ引き出されるのではない。暗黙にせよ、新しい世界に入って行くことを自らも求めて「導き出され」、「導き入れられ」ていくのである。

「教育」の営みは、互いに他を導き他に導かれる「共に育つ」営みとして理解されることになる。「教育は共育」なのである。

※ビデオ表紙画像
黒澤明監督作品
『生きる』
東宝ビデオ

発売元　東宝ビデオ（税抜6,000円）

視聴覚教育のもつ教育力について

視聴覚教育の一つの典型として、映画教育を取り上げて、その教育力を考えてみよう。

ある時、黒澤明監督の映画『生きる』（志村喬主演）を学生さんたちと観たことがあった。ついで、その学生さんたちに、トルストイ原作『イヴァン・イリッチの死』（岩波文庫）を読むことを促した。私が勤務している大学でのことである。

それから半年が経った。私は学生さんたちに尋ねた、「正直言って、いま、どちらが印象に残っているかな？」と。学生さんたちは、異口

同音に、「『生きる』のほうです」と答えた。映画『生きる』は、黒澤が、トルストイの『イヴァン……』に深い感銘を受け、人生を生きること、人間の一生、生と死の意味について考えて、製作した作品である。人々に、人生の意味を覚らせてくれる作品なのである。私の身近な現代の学生さんたちにとっては、黒澤の『生きる』が、トルストイの名作を超えて、生と死について豊かに考える世界に移行することを促したらしい。教育の核たる「覚」が得られたのである。それは、映画を見る「視聴覚」の経験が、「われわれは［映画の］画面の中にいる」し、「映画の中の人物と同一化する」経験だからだ（ベラ・バラージュ著佐々木基一訳『映画の理論』学藝書林、一九七〇年、四〇～四一ページ）、と考えられる。ちなみに、最新技術による仮想現実の経験も、この方向のさらなる充実を可能にしている、とも考えられる。人は、映画を夢中になって視聴しているとき、ちょうど、寺田寅彦の語った「詩歌の世界」に入るように、その映画の世界に、苦もなく入って行く。教師と子どもたちが、一緒に映画を視聴するとき、時には教師を導きとしながら、子どもたちは、その映画の世界に入って行く。映画の世界に入ったことによって、ある「覚」を得るとき、その「覚」を得る以前の世界から導き出され、その「覚」を得た世界に導き入れられて、新しい世界で生きるようになる。そして、そのようにして、生きる世界が新たに変わったとき、「教育＝共育」が成り立った、ということになる。例えば、同じ黒澤明監督の映画『羅生門』は、現象学で言う『人間ひとりひとり』（ヴァン・デン・ベルク著、現代社）の生きる世界の異同と「視点性」を「覚る」のに、極めて優れている。もちろん、「視聴覚教育」の場合、教えることの専門家である教師の専門家としての仕事は何なのか、という問いも改めて問われるかもしれない。この問いに対しては、「教育とは、子どもがみずからの力で思考し、決断し、行動する状況を教師が意図的に配置するいとなみでもある」（武田常夫著『真の授業者をめざして』国土社、一九九〇年、四〇ページ）という、教育の仕事、教師の仕事の本質を表した武田の言葉が、恐らく想起されるだろう。たとえ子どもに教えても、子どもが学ばないときには、教育＝共育の仕事は成立しておらず、教師の仕事も成立していないのだ。教師が、子どもの学ぶ「状況を意図的に配置」し、それによって、教師と共に、子どもたちが豊かに学ぶとき、つまり、共々に新たな「覚」を得て新しい世界に生きることを始めるときには、教育＝共育の仕事はそこで行われていないどころか、まさにそこでこそ、真の教育（＝共育）が成立し、教師の仕事が行われていることになるのだ。サン＝テグジュペリ作（内藤　濯訳）『星の王子さま』（岩波書店、一九六二年）の中に、「心で見なくちゃ、ものごとはよく見えないってことさ、かんじんなことは、目に見えないんだよ」（九九ページ）という言葉がある。この言葉を借りるならば、「目に見えないかんじんなこと」が見えるようになることが「覚」（ること）であり、目に見えることを通して、「目に見えないかんじんなこと」をも目に見えるようにするのが視聴覚教育である、ということになる。

※書籍表紙画像
サン＝テグジュペリ作
（内藤　濯訳）
『星の王子さま』
岩波書店

「覚」を核とする言葉「視聴覚教育」

以上のように考えて来ると、「視聴覚教育」という言葉には、「覚」を中心として、「視聴」

により、「覚」に至る道としての、「教育＝共育」が、いかにも「視聴覚的に」、あたかも絵のように描かれている。「覚」以前の世界から「覚」の世界へと「視聴」を通して導きつつ「教育＝共育」するのが視聴覚教育である、という視聴覚教育の本質が、「視聴覚教育」という言葉には、過不足なく見事に表現されている。波多野完治先生の「視聴覚教育は感性的認識と理性的認識とを統一し、……十全の認識に到達させる教育である」（『テレビの心理学』、一九六三年）という思想も、「具体的なものと抽象的なものと」相互移行の実現に努める「視聴覚的精神」も、図らずも既に、「視聴覚教育」という言葉そのものの中にひそかに潜んでいたようにも、思われて来るのである。言うまでもなく、「十全の認識」とは、我々のここでの表現を用いれば、「覚」ということになるであろう。

「視聴覚教育」が表現している視聴覚教育とは、人と人とが、多様な世界を「視る」経験と「聴く」経験（方法：method：媒介する道）、視覚的・聴覚的経験、によって、互いに誘いあい、「覚る」以前に生きていた古い旧世界から導き出し／出されて、「覚る」以後の新しい新世界（内容：lived world：生きられた世界）へと導き入れ／入れられ、人間として「教えつつ育つ」、「共に育つ」人間たちの営み（目的と意味）である。

これは、「形態論的定義」というより「機能論的定義」に近いが、より正確に言えば、教育を生きている人間の主体的な経験に即した本質的定義とも言うべきで、「メディア」（媒体）に着目するよりも、E・デールの有名な「経験の円錐」にちなんでではないが、視聴覚教育において生起している人間の経験に着目した定義である、ということにもなろう。「視聴覚」という言葉の「視覚的・聴覚的」という意味付けの基盤には、経験を対象として、それが視覚と聴覚によるものであるという、「外の目」による客体的な把握がある。他方、「視る聴く覚る」という意味付けの基盤には、注視、傾聴という主体的な集中による覚醒であるという、経験の「内の目」による主体的な理解がある。こうして、「視聴覚教育」という名称そのものは、そこで起こる多様な人間の経験の「外の目」による客体的理解も「内の目」による主体的理解も、そして、その統合の可能性も、さらに、その本質的定義、「視聴覚的精神」も、一挙に直接に過不足なく表現していることが、明らかとなってくる。

いやはや、何と見事な名称であることよ。まさに感嘆に値する。

視聴覚教育における新しい技術は、「覚」のためにこそある。新技術が開発されるということは、それを活用して教育（＝共育）する人間にとって、新しい経験の可能性が生まれる、ということであり、新しい世界が開かれ実現される可能性が生まれることであり、新しい「覚」が可能となる、ということなのだ。未知の世界への「小さな穴」が大きくなるということなのだ。

以上が、前述の、私にとっての「覚」であり、新しい発見であった。

「視聴覚教育」

視・聴・覚・教・育

ただ見るのではなくて、

視る　を誘う

教える　えられる

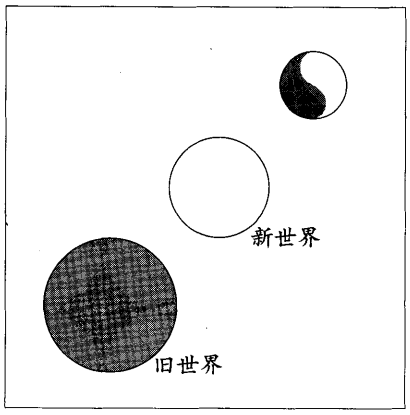
覚る　を誘う

ただ聞くのではなくて、

聴く　を誘う

育つ　てる／てられる　【ハグク】む／まれる

翻訳文化国家日本で、翻訳語として誕生した「視聴覚教育」が、その原語の狭い意味を遥かに越えて、日本における視聴覚教育の長年に亘る理論と実践の歴史をかけて、日本語として熟成し、育って来たように思われる。翻訳語「視聴覚教育」は、原語 Audiovisual Education を藍とするなら、「藍より出でて藍より青い」含蓄豊かな言葉だ、というべきではなかろうか。例えば、「ソニー」、「カブキ」、「ラショウモン」、「クロサワ」、「ミフネ」などと伍して、「シ・チョウ・カク・キョウ・イク」"Shichokaku Kyouiku"あるいは"Shichokaku Education"という言葉もまた、日本から世界に向けて発信する価値ある言葉だ、などと夢想したりもする。「時代遅れの判官びいき」として書き始めたこの文章が、いつの間にか、夢はふくらんで、今日の荒廃した教育の再生のために「視聴覚教育」が果たすべき重大な役割に「目〈覚〉める」、「視聴覚教育のルネッサンス（再生）」への時代に先駆ける「呼びかけ」とも思われ始めることに、ふと気がついた。これは、錯〈覚〉か、あるいは、〈覚〉醒か。



普遍的に言えば、「旧世界」に住み込んでいる我々は、「旧世界」から「新世界」へ、そしてさらに、その「新世界」から「新旧両世界を統合する世界」へと、つき進んで行く。ヘーゲルの言った「真無限」である。そこで、やや性急に先走りして言えば、視聴覚教育の世界は、「視覚的・聴覚的・教育」としての旧世界から、「視聴〈覚〉世界」としての新世界に移り行き、ついで、新旧両世界を統合する真の「視聴覚教育」の世界へと移行する、という将来の道行きを思い描くこともできよう。しかし、先を急ぎ過ぎてはならない。確実に、原点に立ち返り、「視聴〈覚〉世界」の「覚」に目覚めることが肝要。先ばかり見て、険路から転げ落ちないように、まず、「視て聴いて覚る」こととしよう。

おわりに

二〇世紀の閉幕も目前、いよいよ二一世紀を迎える。二〇世紀は二つの世界大戦と科学技術の発展の時代、「ものの時代」であった、などともよく言われる。そして、今日の教育の世界は、科学技術偏重と人間と自然と生命の軽視から生まれた深刻な荒廃に悩まされている。二一世紀は、二〇世紀「ものの時代」の成果を踏まえた「情報の時代」としてばかりでなく、それを踏まえつつもそれを超えて生命尊重の豊かな「こころの時代」として統合され、展開することが期待される。人類の歴史の上では、科学・技術と芸術・宗教、「もの」と「からだ」と「こころ」、自己と他者、知と情と意、人間と他の生き物たち、西と東ばかりでなく北と南、などなどを統合する人類の英知が豊かに華開く世紀となることを望みたい。地球上の人類が歩む遥かな道を望みつつ、新しい世界が眼前に開かれて来る思いがする。「視聴〈覚〉教育」の新しい世界の「覚」により、日本の教育ばかりでなく、世界の教育が、今日の「ものの時代」の「こころの荒廃」の惨状から救われることを、こころある読者と共に祈りたい。